知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌［ココナッツクラブ］

COCONUTS CLUB

OCTOBER 2018
10

「みんなの縁がわ」のみんな

「みんなの縁がわ」のみんな

常滑の中心部に「みんなの縁がわ」と名付けられた施設がある。
集会所のようでもあり、イベント会場のようでもあり、店のようでもあるここは、
さまざまな顔を持ち、さまざまな人が集まる新しいタイプの「まちづくりの拠点」だ。
その多彩な活動に迫ってみる。

「みんなの縁がわ」へようこそ

「みんなの縁がわ」のことを簡潔に説明するのは難しい。あえて言うならコミュニティスペースやコミュニティサロンと表現するのが妥当なところだが、そんな既存の枠では収まりきらない「場所」である。そして、単なる場所にとどまらない「集まり」でもある。さらに言えば、場所と集まりが有機的に結びついた「活動体」でもある。

分かりづらいと思うので、まずはこの「場所」をざっと案内しておこう。

＊　＊　＊

所在地は常滑市の本町通り。本誌前々号「街道看板紀行 其の三」でも少し触れたが、この通りはかつて商店が軒を連ね、多くの人で賑わった常滑のメインストリートである。その町並みの中ほどにあった豊田屋酒店が「みんなの縁がわ」だ。店は明治十一年（一八七八）に創業し、酒、調味料、乾物、輸入食品、パンなどを商ってきた本町きっての老舗。百年以上にわたり地元の人に親しまれてきたが、数年前に商売に区切りを付け「みんなの縁がわ」にバトンタッチした。

建物の外観はほぼ昭和四十年代のまま。中も往時の面影を留めている。しかし、かつて商品が所せましと並んでいた店舗には、今や机や椅子が並べられた広い空間になっている。ここは活動の核と

毎月第2土曜開催の「朝ごはん」のメニュー

昭和40年頃の建て替え以前の豊田屋酒店

主宰者の渡辺美佐さん（左）と、お母さんの鈴木圭子さん

ここにはいつも誰かがいて、いつも何かをやっている。

も言うべき共用スペースだ。通常は打ち合わせ、歓談、休憩、遊び場など、利用者が自由に出入りして滞在できるようになっており、「みんなの本だな」と名付けられた棚に並ぶ本を読み耽る人や、片隅に置かれたゴム銃遊びに興じる子供たちもいる。ここが時に、ピアノ教室、イベント、ワークショップ、コンサート、小学生の学習サポートなどの会場に早変わりする。

奥にある扉の向こう側は、かつて商品の在庫などが保管されていた倉庫だ。今も半分は倉庫として使われているが、もう半分はカフェ兼洋菓子店に姿を変えている。店名は「みんなの縁がわカフェ部」と「本町御菓子工房」。客席は、ガレージそのままの空間に椅子とテーブルを置いただけだが、厨房部分は自然な風合いの板壁で区切られており、建物の中にもうひとつ建物があるようで面白い。素っ気なさと洒落っ気がいい塩梅に混在し、普通の店にはない独特の風情を醸し出している。

店の見た目こそ一風変わっているが、ここを担うのはパティシエなので味も折り紙付き。ドリンク類は一杯三百円の均一価格で、エスプレッソマシンで淹れるラテや有機栽培豆のみを使ったコーヒーが人気。洋菓子は手軽に味わえるクッキー、ガトーショコラ、バウムクーヘンなど種類豊富で、手土産にしても喜ばれるだろう。夏にはかき氷も販売する。

厨房と倉庫の間を抜けていったん建物の外に出ると、屋外に取り付けられた階段が見える。それを登って二階に行くと、十畳ほどの和室がある。ここは第二の共用スペースで、定期的に書道教室やヨガ教室などが開かれるほか、ワークショップの会場になることも。このほか、旧店舗の裏手にある母屋の二階にはボディケアサロンがあり、こちらは言わば「縁がわ別館」の位置付けである。

構造をなんとなくイメージしていただけただろうか。かいつまんで言うとこの「場所」は、イベント・ワークショップ会場を提供するレンタルスペースと、固定の店や教室がテナントとして入る商業施設がひとつになっているのである。

「みんなの縁がわ」の日常風景

ここで繰り広げられる「集まり」は、作家・講師・専門家などの個人、グループやサークル、公共系の団体などが企画し、時には「みんなの縁がわ」の自主企画も実施される。企画の内容は多種多彩、主催者・参加者の顔触れは多士済々。写真に登場していただいたのは、そのうちのごく一部の皆さんにすぎない。

その「集まり」をすべて書き連ねる紙幅はないので、ほんの一例を紹介しよう。

七月半ばのある朝に訪ねると、二階ではヨガ教室の真っ最中だった。この時、一階のカフェ部では、焼き立てパンや野菜プレートを頬張る人たちがいる。これは、定期的に開催している「朝ごはん」という出張ベーカリーカフェ。やがてヨガを終えて下りてきた人たちもオーダーし、にわかに活気づいた。

また、八月初めのある日の昼前に行ってみると、共用スペースのテーブルに炊飯器が置かれていた。程なくして十数種類の惣菜も並べられ、時計が十二時を回ると人も続々と集まってきた。何かと思えば、武豊を拠点とする出張弁当店「ちゃり弁」が料理を用意したランチバイキングだった。にぎやかな昼食タイムが終わり皿が片付けられると、そのままここで音楽教室の先生による「歌を楽しむ会」が始まった。楽しげな歌声が響き始めた頃、一人の女性が現れ、倉庫の片隅に置かれた桶の中を覗き込む。桶の中身は醤油で、手作り醤油のワークショップの参加者の一人が熟成具合を当番で確かめに来ているのだった。

このように、ここには毎日いろいろな人が出入りし、いろいろなことが行われている。その「集まり」はあまりに多岐にわたっているので、たった数日訪れただけでは全貌を把握しきれないのだ。多様性、そんな言葉が頭をよぎる。

ここがうまく回っているのは、多様な人と企画をうまくコントロールする統括者がいるからだ。その人は「みんなの縁がわ」の主宰者、渡辺美佐さんである。

「みんなの縁がわ」の始まり

どのような経緯で渡辺さんは「みんなの縁がわ」を始めたのか。その経緯を追ってみよう。

豊田屋酒店は渡辺さんの実家で、豊田屋酒店の実質的な五代目店主である。五代目というのは比喩ではない。実はまだ店は完全に廃業しておらず、共用スペースではソフトドリンク、味醂、白老の梅酒などを常備している。酒類販売免許も維持しており、イベントでアルコール類を販売することもできる。

先代の店主は、今年五月に亡くなった父の鈴木信嘉さん。高度成長期から平成二十年代まで長きにわたり、妻の圭子さんと二人三脚で商いを続けてきた。常滑の中心商店街に人が集まった時代は大いに繁盛し、バイパス沿いにできたユニー常滑店内に「グルマン」という名で支店を出していた時期もあるほど。長女の渡辺さんは大学卒業後の約七年間、そのグルマンの店長として家業に携わった経験もある。結婚して嫁いでからは、ご主人の実家が営む会社での日常業務と子育てに追われ、実家の店の経営からは離れた。

しかし、時代の流れとともに商店街から人波が消え、年をとった両親が店を続けることも難しくなっていった。いよいよ決断を迫られたのは五、六年前のこと。現状を考えると、商売をやめるのも仕方がない。しかし町の真ん中で長年親しまれてきたこの建物を空き家にしてしまうのはいかにも惜しい。ならば常滑を盛り上げるためにも、うまく活用できないか。

渡辺さんがそんなことを考えていた頃、大府の国立長寿医療研究センターで高齢者の社会参加について研究していた旧友と再会する。その人から、高齢者向けの講座をやってみたいので空いている部屋を会場として貸してもらえないか、との申し出を受けた。

これを快諾した渡辺さんは旧友と一緒に、研究者や医師を講師に迎えたセミナーと、参加者どうしの気軽な茶話会の時間を設けた会を企画する。この講座は「縁がわカフェ」と銘打ち、平成二十五年(二〇一三)九月から定期的に開催するようになった。渡辺さんはこの体験を経て「人が集まることは、自分の性に合うんだと感じました」という。それはおそらく、子供の頃から社交場のような店の中で成長してきたことも影響しているのだろう。

手応えを感じた渡辺さんは、自身の仕事の傍ら、町づくりやコミュニティの勉強会などに参加して先行事例や具体策を学び、同時に、より活動しやすい場を整えるべく店内の改装に着手する。その間にも常滑市社会福祉協議会からのオファーも受けている(その繋がりがのちに「瀬木みんなの居場所」という地元の高齢者や住民を対象にした月例企画へと発展した)。当初は、シェアハウスや学童保育なども考えていたが、スタッフの確保、運営資金、開設のためにクリアしなければならない法的な問題などさまざまな難関があり、最終的にはレンタルスペースを軸にした「場所+集まり」という方向性に定まってゆく。

そうして翌二十六年八月、この活動体を「みんなの縁がわ」と命名し、手始めにFacebookページを開設。次いで十月には初の自主企画イベント「日本酒ことはじめ」を開催。とりあえずできる範囲のゆっくりしたペースで「みんなの縁がわ」は始動した。

交友関係の広い渡辺さんだが「スタートの頃からなるべく自分のネットワークは使わないように心掛けました」という。知人に頼れば自然と枠ができてしまい活動も固定化してしまうのではという危惧があったからだ。大きな宣伝はせずSNSで情報発信をするだけだったが、存在と活動は少しずつ知られていった。ある講座に参加した人が「自分もやってみよう」とワークショップを立ち上げたり、あるイベントに参加した人が別のイベントに友達を連れてきたり、ここで出会った友達の友達と友達になったり…というように、縁が縁を呼び、縁の輪がどんどん大きくなっていった。

広がり続ける人の縁を原動力に、この活動体は動いている。

「みんなの縁がわ」に集う人々

どんな縁が、かくも多様な人たちを引き寄せたのだろうか。「みんなの縁がわ」で頻繁に顔を見かける三人に、こことの縁を聞いてみた。

毎週月・金曜に書道教室を開いている「さつき書道会」の澤田佳久さんは、最初期から参加している一人だ。渡辺さんとはまったく面識がなかったが、知人を通じて教室開講のオファーを受けた。

渡辺さんは、立ち上げ時から書道や絵画などの教室を開催する構想を持っていた。それは、教室に通う子供たちと一緒に、親たちもここへ来てくれるようになるだろうと考えてのこと。講師を探していたとき、半田市亀崎のまちおこし活動拠点「まちかどサロンかめとも」で書道教室を開講していた澤田さんのことをFacebookで知る。「従来型の書道教室ではなくプラスアルファのものを求めていたんです」という渡辺さんは、澤田さんがレクリエーションを取り入れるなどして子供がより書道に親しめるよう心を配っていることに共感した。そこで伝手を探したところ、たまたま澤田さんと面識がある知人がおり、紹介してもらった。

パティシエの後藤周一さんはまだ三十歳と若いが、「みんなの縁がわカフェ部／本町御菓子工房」の雇われ店長ではなく、歴とした経営者である。後藤さんは渡辺さんの息子の友人で、渡辺さんも幼少時からよく知っていたが、ここに参加するまでしばらく会っていなかった。再会のきっかけを作ったのは、先に触れたエスプレッソマシンだったという。

子供の頃からお菓子作りや料理が得意だった後藤さんは、生まれ育った常滑でカフェをやりたいという夢を長年温めており、製菓学校を卒業後、ケーキ屋、コーヒー専門店、イタリアンレストラン、コーヒー豆の卸会社などで〝自主修業〟を続けていた。エスプレッソマシンは修業時代に手に入れたもので、業務用で高価だったが、将来を見据えて自費で購入したという。それを使い始めて、自身のFacebookにアップしたところ、久々に渡辺さんから連絡があった。「うちのイベントで使ってみたら?」と誘われたのだ。

それを機に「みんなの縁がわ」の企画に度々参加するようになった後藤さんは、次第に「ここでカフェができないか」との思いを強くしてゆく。一方で渡辺さんも「常設カフェがあれば、子供の教室のあいだ親御さんが待つことができるだけなく、誰でも気軽に立ち寄れる」と考えていた。そんな二人の思いが一致して開店を目指すことになり、平成二十八年(二〇一六)十一月に飲食営業許可を取得してカフェ部が始動。一年後には工房も完成した。

オリジナルメニューを提供するカフェ部の登場が、「みんなの縁がわ」をそれまで以上に地域に開かれた場所にした。常に店にいる後藤さんは、現在は施設全体の店番と、広報窓口を兼ねたような立場になっている。

整体師の大友陽子さんは、母屋の二階でボディケアとリフレクソロジーのサロン「Karada*ループ」を週四基本で営業している。大友さんの場合は、澤田さんの書道教室に子供を通わせていた知人の誘いで、気軽な気持ちで覗きに来たのがきっかけ。ちょうど開業するための場所を探していた矢先で、立地的にも空間的にもほどよいことと、活動の面白

みんなの縁がわ／常滑市本町3-139／基本的に9〜18時オープン、カフェ部は13〜18時／日曜休(イベント・ワークショップ開催時はオープン)／問い合わせは080-5103-9289(留守電対応にしてあります。『縁がわの問い合わせ』とメッセージを残していただければ折り返しご連絡いたします)／教室・イベント・ワークショップ等の開催については「みんなの縁がわ」のFacebookをご覧ください

これからの地域社会のあるべき姿を「みんなの縁がわ」は表現している。

さが気に入り、この一室を借りて仕事をすることを決めた。

ここにいる時間が長い大友さんと後藤さんは、空いた時間に渡辺さんのお母さんの圭子さんと過ごしたりもする。圭子さんは高齢ながら矍鑠（かくしゃく）としているので「世話をする」というほど大げさなものでもないが、図らずも見守りをしている格好だ。「単なる家主とテナントではなく、昔の長屋の大家さんと店子（たなこ）のような関係ですね」と大友さんは話す。

渡辺さんは「みんなの縁がわ」の主宰者ではあるが、仕事を持っているので常駐はできない。しかし、この三人のような〝店子〟がいるので、催しのないときも常時開けておくことができるのである。

＊　＊　＊

スタートから四年がすぎた現在は、少なくとも土日はほぼ何かの催しが行われているという。これは「みんなの縁がわ」の認知度が高まり、根付いてきたことの表れだろう。

渡辺さんは「やりたいことのある人が、やりたいことをできる場所が、地域にあることが大事だと思うんです」と強調する。その目指すものに「みんなの縁がわ」は育ちつつあり、同時に「ここだからできること、ここでしかできないこと」も生み出し始めている。ここで生まれた新たな縁は、これからもますます広がっていきそうだ。

取材協力◎渡辺美佐さん／鈴木圭子さん／伊藤利栄子さん（ヨガ講師）／大友陽子さん（Karada*ループ）／川﨑哲也さん（木工）／川﨑理江さん（雑貨クリエーター）／後藤周一さん（本町御菓子工房）／榊原隆さん（ちゃり弁）／榊原直樹さん（みんなの本だな）／澤田裕美さん（ピアノ講師）／澤田佳久さん（さつき書道会）／土井梢さん（ベビー・キッズマッサージ講師）／中野真紀さん（手作りパン・Maki Maki商店）／田島洋美さん（音楽教室べるかんと）／多田ひづるさん（ネイリスト）／増田純子さん（糸かけマンダラ作家）／松本仁さん（絵本おはなし会）／村田富美さん（算数・数学・大人英会話教室）／森田久美子さん（腸大事講座）／守山典子さん（ポスター・デコナップ・ウクレレ教室）／金城学院大学人間科学部コミュニティ福祉学科 朝倉ゼミ／常滑市社会福祉協議会